

日本の名作名文ハイライト

十二夜

樋口一葉

朗読 馬場精子

出所 くさどばの世界

<http://www.voiceblog.jp/hitoha/>

teabreak 編

十三夜 樋口一葉

例は威勢よき黒ぬり車の、それ門に音が止まった娘ではないかと両親に出迎はれつる物を、今宵は辻より飛のりの車さえ帰して悄然と格子戸の外に立てば、家内には父親が相かわらずの高声、いわば私も福人の一人、いずれも柔順しい子供を持って育てるに手は懸らず人には褒められる、分外の欲さえ渴かねばこの上に望みもなし、やれ／＼有難い事と物がたられる、あの相手は定めし母様、ああ何も御存じなしに彼のように喜んでお出遊ばす物を、何の顔さげて離縁状もらうて下されと言われた物か、叱られるは必定、太郎という子もある身にて置いて駆け出して来るまでには種々思案もし尽しての後なれど、今更にお老人を驚かしてこれまでの喜びを水の泡にさせます事つらや、寧ろ話さずに戻ろうか、戻れば太郎の母と言われて何時／＼までも原田の奥様、御両親に奏任の聲がある身と自慢させ、私さえ身を節儉れば時たまはお口に合う者お小遣いも差あげられるに、思うままを通して離縁とならば太郎には継母の憂き目を見せ、御両親には今までの自慢の鼻にわかになくさせまして、人の思はく、弟の行末、ああこの身一つの心から出世の真も止めずはならず、戻ろうか、戻ろうか、あの鬼のような我「良人のもとに戻ろうか、彼の鬼の、鬼の良人のもとへええ厭や厭やと身をふるはす途端、よろ／＼として思わず格子にがた

りと音さすれば、誰れだと大きく父親の声、道ゆく悪太郎の悪戯とまがえてなるべし。

外なるはおほほと笑うて、お父様私で御座んすといかにも可愛き声、や、誰れだ、誰れであったと障子を引明けて、ほうお関か、何だなその様な処に立っていて、何うしてまたこのおそくに出かけて来た、車もなし、女中も連れずか、やれ／＼ま早く中へ這入れ、さあ這入れ、何うも不意に驚かされたようでも／＼するわな、格子は閉めずとも宜い、私しが閉める、兎も角も奥がいい、ずっとお月様のさす方へさ、蒲団へ乗れ、蒲団へ、何うも豊が汚ないので大屋に言っては置いたが職人の都合があると言うてな、遠慮も何も入らない着物がたまらぬからそれを敷ひてくれ、やれ／＼何うしてこの遅くにでてきたお宅では皆お変わりもなしかと例に替らずもてはやさるれば、針の席にのる様にて奥さま扱かひ情なくじっと涙を吞込んで、はい誰れも時候の障りも御座りませぬ、私は申訳のない御無沙汰しておりましたが貴君もお母様も御機嫌よくいらつしやりますかと問えば、いや最う私は噓一つせぬ位、お袋は時たま例の血の道と言う奴を始めるがの、それも蒲団かぶって半日も居ればけろ／＼とする病だから子細はなしさと元氣よく呵々と笑うに、亥之さんが見えませぬが今晚は何処へか参りましたか、彼の子も替らず勉強で御座んすかと問えば、母親はほた／＼として茶を進めながら、亥これは今しがた夜学に出て行きました、あれ

もお前お蔭さまでこの間は昇給させて頂いたし、課長様が可愛がって下さるので何れ位心丈夫であろう、これと言うもやはり原田さんの縁引が有るからだとして宅では毎日いひ暮しています、お前に如才は有るまいけれどこの後とも原田さんの御機嫌のいいように、亥これは彼の通り口の重い質だし何れお目に懸ってもあつけない御挨拶よりほかできまいと思われるから、何分ともお前が中に立って私どもの心が通じるよう、亥これが行末をもお頼み申て置いておくれ、ほんに替り目で陽気が悪いけれど太郎さんは何時も悪戯をしていますか、なぜに今夜は連れてお出でない、お祖父さんも恋しがってお出なされた物と言われて、また今更にうら悲しく、連れて来やうと思いましたが彼の子は宵まどいで最う疾うに寝ましたからそのまま置いて参りました、本当に悪戯ばかりつりまして聞わけとは少しもなく、外へ出れば跡を追いまするし、家内に居れば私の傍ばかり覗うて、ほんに／＼手が懸って成ませぬ、なぜ彼様で御座りましょうと言いかけて思ひ出しの涙むねの中に漲るように、思い切って置いては来たれど今頃は目を覚まして母さん母さんと婢女どもを迷惑がらせ、煎餅やおこしの※しも利かで、皆々手を引いて鬼に食はすと威かしてでも居やう、あ可愛そうな事をと声たてても泣きたきを、さしも両親の機嫌よげなるに言い出かねて、煙にまぎらす煙草二三服、空咳こん／＼として涙を襦袢の袖にかくしぬ。